

変えてならないから、変える

自然災害において、我々は災害列島に居住しているわけですので、災害と付き合うということでは、この先も自然現象と一緒に生活を営んでいくということになります。したがって、付き合う相手のことを知って、共生していかなければならないということです。人間と自然のサイクルは大きく違いがありますが、自然のサイクルに支障があるような負荷は、できるだけ小さくすることで、災害への被害も小さくできるということがあると思います。自然災害に遭遇しても、被害を出さないということは、人は上手に避難し、物は自然の力に耐えるということを試みることだと思います。

しかし、それらのことをしても、自然現象を抑止することはできないし、抑制することも不可能なことですが、被害を少なくするという意味では、何をするのかというよりもどうすべきかが重要となります。それは、モノづくり的に言うならば、開発目標に相当するもので、自分で設定するものではなく、時代、文化、環境、人々の要求、社会構造の変化あるいは経験の度合いを考えながら、使ってもらえるもの、買ってもらえるものを設計するというように似ているような気がします。防災におけるソフト対策では、「〇〇のはず」とか「〇〇になる」というような片思いだけでは、うまく災害時に機能しないということが、たびたびの災害で分かってきています。つまり、対策を構築するには、不満に思っていること、想定通りに機能しないこと、今はないがあつたら良いとおもっていること、お金を払ってでも手に入れたと思うことというような、要求機能を満足すべき価値向上を図ることを工夫していく必要があると思われまふ。

ものごとの発想とは、知識の蓄積があつて、その上での考えを深化させることであると考えると、頭の中にどれだけの知識を持っているのかということに加えて、その知識が常日頃から整理されていて、必要なときに引き出されるのかということが必要となります。そして、ためているだけではなく、使うために活性化しておくことが求められると思います。つまり、他地域で発生した自然災害の例などを参考にして、常に問題意識をもって課題を解決することを継続させていく必要があると思います。

一方的に、自治体が情報を提供しても、それを適切に行動に移すことができなければ意味がないし、それができないとなればどこかに原因が潜在しているというところをえ方していくべきです。

防災を国民の総意として、いかなる対策があろうとも、この列島に居住する限りは自然災害と付き合う必要があるということを持ち続けるために、様々な対応が必要になります。しかし、それは他人任せではなく、一人一人が意識して自然災害のメカニズムを知り、自然への負荷を可能な限り最小にすることを念頭に付き合っていくことが避けられません。ここに、変えてならないものと変えなければならないことがあると思います。そのために、特にソフト対策という段階は、新たな価値創造が求められ、どうすれば住民に役立つ機能をもたらされるかは、ある意味でものづくりに通じるもののような気がします。